

令和2年度 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会

分科会（高校普通科） 第1回 議事録

日時	令和2年11月20日（金）16:00～18:00
場所	三菱UFJリサーチ&コンサルティング会議室（Zoom会議併用）
委員	宍戸 学 日本大学 国際関係学部 国際総合政策学科 教授【総括座長】 高嶋 竜平 法政大学国際高等学校 教諭 中村 太悟 学校法人希望が丘学園鳳凰高等学校 教諭【リモート参加】 村上 和夫 立教大学 名誉教授【座長】 (氏名五十音順・敬称略)

1. 開会・挨拶

○事務局・MURC 平川

定刻になりましたので、令和2年度 第1回 初等中等教育における観光教育の推進に関する協議会 高校普通科第1回分科会を開催いたします。

まずは、資料3と4が逆になっており、手書きにて訂正させていただいております。資料4が観光庁の資料になります。

開会に先立ちまして、参事官の刀根様のよりご挨拶申し上げます。

○観光庁・刀根

本日はお集まりいただきありがとうございます。事前の準備等にもご協力いただきありがとうございました。本来であれば我々の部室の参事官や総括補佐が出席する予定でしたが、他の業務のため私から挨拶させていただきます。後ほど、私からは、前回の協議会の話とこれからの分科会の方向性について簡単にご説明させていただきます。

2. 趣旨説明

○事務局・MURC 平川

資料3を説明。

3. 参加者自己紹介（観光教育に対する思い・課題感）

○立教大学・村上委員

私は1980年頃から観光教育を実践しております。主に大学で観光教育を実践し、最後は中高一貫校の校長をしながら観光教育を実践してきました。その他、多くの場面で観光教育について実践し、紹介してきました。よろしく申し上げます。

○日本大学・宍戸委員

協議会の委員を拝命しており、かつ、本分科会における高校専門科の座長と分科会全体の統括座長を拝命しています。

私自身、大学卒業後に高校の教員をしていました。その高校では観光教育に10年くらい取り組んでいました。その時から高校生の観光学習のあり方を考えてきました。学習指導要領にはなく、教員もいないなど、今まさに観光教育を現場でやる時に向き合うような課題を自ら体験してきました。その後、大学院で観光教育を中心にいろんな研究するなかで村上先生にもご指導いただき、いろいろと視野が広がりました。

まだまだ難しい課題もあると思っています。特に今、直接かかわっている中では、高校専門科等において、2022年の学習指導要領から段階的に「観光ビジネス」という授業が始まり、念願の学習指導要領に科目が設置されたことは喜ばしいことですが、これが10年程度で消えないように頑張ろうというのが強く思っているところであります。高校の先生方と話しながら進めているところで、このような会議が立ち上がり嬉しく思っています。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

私は、立教大学観光研究科において、博士後期課程の際に村上先生にご指導いただきました。現在は大学付属校の社会科教員をしております。

勤務校の法政大学国際高等学校は必ずしも観光というものに関心があった学校ではありません。また私は学生の頃、将来は社会科の教員になりたいという希望があり、自分が高校で観光教育に取り組むことはイメージしていませんでした。やがて大学院生の頃に高校で観光教育の動きがあることを知り興味を持っていましたが、自分が観光教育に関わることができるとは思いませんでした。しかし専任教員となった法政大学国際高等学校は選択授業で多種多様な授業ができることを知り、観光教育を始めてみて16年が経過しています。

私は観光教育に関わっていながらも、社会科教員というこだわりも持っています。社会科と観光の両方に関心を持っているところから、観光教育において何か視点が提示できればと思っています。実際に、社会科という分野は観光に非常に関連する内容が多く、観光教育のような内容が様々な場面で展開しています。ただし、観光という観点で深めていくと面白いことになるという発想は社会科の中ではまだ持っていないと思います。観光産業や研究を行っている大学やまちづくり団体と連携し、社会科教育の課題として、また、専門性を持った教育のテーマとして深めていくことができると面白いと考えています。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

私は理科の教員です。3年前から地域と関わりながら活動を行っています。きっかけは生徒の「台湾に行きたい」という一言で、サイクリングと絡めて（台湾はサイクリングが有名なため）交流ができないかと取組んだのが最初でした。観光教育を実践している認識はなかったが、今していることを見つめ直すと観光につながる部分もあると思いました。

観光庁の刀根さんにお会いしたのは今年の観光甲子園決勝大会で、その時も生徒主体で作成した動画を発表しました。

私は普通科の教員のため、専門科と比較して地域との接点を作りにくいことを実感しています。

商業科などの専門科の教員は商品開発などで関わりやすいが、普通科では難しいと思っています。そのような中、当市の観光協会はアクティブに受入れしていただき、支援を受けながら活動しています。

観光協会にも伝えていることですが、観光教育を実践する上で気を付けていることは、地域が成果の活動によって盛り上がりながらも当校としては責任を負わないということです。その部分は観光協会に頑張ってもらいたいと思います。

私は学びという点で生徒が地域を活用して自分のキャリアや自己に向き合うという活動を推進したいと思っています。教育と観光をつなげる意味でも、私は私の役割、観光協会は協会の役割でうまくマッチングできたら、という思いで話させていただきました。

本心から地域が盛り上がりなくて良いと思っているわけではないためご理解いただきたいが、一般的なボランティアは利用されることもあり、特に地方は「人手」と認識されることがあります。そのため、生徒に如何に還元できるかを踏まえて、現在の関係性を築かせていただいている。

観光教育を進める上でも、地域の方々と地盤形成、関係性づくりが最初に必要と認識しながら観光教育を実施しています。

○観光庁・西川

よろしく申し上げます。

4. 意見交換

①観光教育で育つ「資質・能力」（観光の力）について

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

私は、「実行力」が重要だと感じています。私自身は観光教育をゲリラ的に始めましたが、今ようやく花が咲いて、活動を評価してもらえています。

そのような活動に関して、「能力がない」、「私にはさすがでできない」など、謙遜する生徒がとても多いと感じています。「実際にやってみる」、「続けてみる」といった能力の方が重要だと思っています。そういう思いで「実行力」という項目を挙げさせていただきました。

当校の普通科でも言っているのですが、失敗を恐れる高校生が非常に多いです。「正解を答えられないといけない」、「間違えていたらどうしよう」などというところから、結局何も行動しない生徒が非常に多い印象で、「実行力」は観光教育において育てたい能力だと思っています。

○立教大学・村上委員

中村先生のおっしゃっている内容は非常によくわかります。普通科の生徒はそういった傾向があると思います。

大学付属校生にも言えることで、大学付属校生は日常の生活がそのまま大学につながるため、日常的に失敗しないように生活しているように感じています。それは主体性が欠落しているということになります。周りの人が認めてくれるものだけしようという風潮になっており、「自分の生活も豊かにする楽しいことである」ということを観光教育の中で求めないいけないと思います。まさに実行力がないとそれは生まれてきもしないので、中村先生がおっしゃる通り、小中学校と

違い、高等学校は実行力がものすごく重要なところだと思いました。指導要領における主体性と表裏一体ということだと思えます。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

中村先生の「実行力」という点では、やらないといけないと思いつつ、自分はできていないのが実情です。確かに、大学付属校の状況の中では、無難に成績を稼ぎたがる生徒が多いです。

私は、観光教育は「気づく力」だと思っています。例えば、レポートを書く際や現地を調査しようという活動の際に、教員が積極的に課題を提示する一方で、生徒は無難にこなしていくという状況が起こることもあります。もっと調査対象に対して主体的にアプローチする体験を持たせることが重要だと思います。観光教育に取り組む際は、「あなたが興味を持っていること内容」、「出かけて楽しかったこと」などは、観光学の枠組みで考えると立派な研究対象であり、興味の赴くままに調べて出てきたことも、実は素晴らしい社会調査に繋がるため、まずはやってみようという伝えています。その上で、自分自身が興味の赴くままに調べてみたものはまた別の観点から見るとこういう要素もあるんだということを生徒と共有して、さらに次の研究に発展させていく可能性を伝えていくようにすると、課題を見つけること、現地を調査することの物事に気づくことの面白さに気づいていきます。その面白いことを体験することが、今後社会に主体的に携わるといふ成功体験につながり、それはは大学生活でも生きてくると思っています。まずは、学問の入り口としての「気づく力」があると思っています。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

高嶋先生の話は、全くその通りだと思いました。生徒に「何が楽しい?」、「何がしたい?」と聞いても「分からない」という回答が多いなか、自分が好きなこと、興味のあること、得意なこと、やってみたいことに気づかず、あるはずなのに蓋をしまっている印象です。

○立教大学・村上委員

中村先生の学校は共学ですか?

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

共学です。以前は女子高でした。

○立教大学・村上委員

高嶋先生の高校は、今は共学で以前は女子高でした。私が校長をしていた高校は、昔男子校で、今は共学です。その時に我々が一番気を付けるのは、地域とのトラブルでした。派手な男子生徒がいると日常的なトラブルから地域とのかかわりは発生することがあったのですが、今は昔に比べてその懸念は小さくなりました。

私が高校で実施していた授業では、地域の話や観察から報告をさせ、記録のつくり方を教えていました。例えば、長野県の小布施など限られたエリア内で自由行動にして、地域との摩擦が起きやすいような条件を整えて実施していました。男子校ならそれが思惑通りでしたが、女子高の生徒は言われた範囲内を見て、写真のように観察していただけでした。女子高と男子校の生徒を

混ぜて行った際は、想定した摩擦が起きて面白いことになり、それが教育成果になりました。そのようなことが観光教育によってできるのではないかなと考えています。

例えば、生徒に何を食べても良いなど提案しても、最初生徒は恐れてしまう。後から報告すれば何でも良いとすると、何であったのかという評価が後から挙がってきます。したがって、恐らく、小布施の地域としては最高に美味しいものがあり、その一番おいしいものと東京で食べているものとの差を感じることができたのではないかと思います。このような気づきは、教科で教えている気づきとは違い、日常的な社会の中での気づくものであり、観光の重要な視点です。

修学旅行における自由行動の有無はどうでしょうか？

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

修学旅行ではバスで移動することが多いです。今年、東京に行く修学旅行を予定しています。コロナで行けるか分かりませんが、そこでは自主研修を挟むため、自由行動も検討しています。

②観光教育と「社会の関わり」について 参考資料 2 ページ

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

社会との関りの中で、地方ならではの感覚で考えていることは、地域の中で能力を発揮した経験がないまま県外に出て行っているという点です。普通科の高校の先生だとわかると思いますが、進学のために夏休みも補習をしてずっと教室にいるなど、将来の夢が育たないところにつながっているのではないかと思います。地域の中で社会との関りを作っていくことで、自分の能力を発揮できる経験が U ターンにもつながってくると思っています。

社会のかかわりの中で重要だと思うのが、資料に記載の 2 点目です。例えば、学校で講演があった場合など、一方的な利用（講師の方に一方的に話してもらっただけ）に留まらないことが重要だと思っています。これは、子どもだけでなく大人も学んでほしいと思います。

また、記載の 4 点目ですが、地域とのかかわりの中でお金を生み出す経験をしてほしいと思っています。大学に行って、勉強して、就職したらすぐお金を生むことになりますが、アルバイトでも良いので（できれば地域に近いところで）、どのように地域の人がお金を生み出しているのか、消費者になる前に生産者の経験をして社会とかわかってほしいと思っています。

○立教大学・村上委員

観光教育の意義目的と同じ記載内容ですが、一点目は、自分のワークライフバランスを考えさせたい、つまり働き過ぎないようにさせたいと思っています。観光に行くことは余暇活動ですので、主体性があれば WLB のうち L を重視するはずですが、現状は W の方を充実する教育があるので十分に遊べないのではないかなという点を懸念しています。事例として有名なのはドイツの「時間預金制度」です。ドイツでは超過労働時間が預金になり、預金を活用して労働時間を短縮できるため、親は預金して子どもとの時間を作り、時間の過ごし方を教えています。労働時間が短い、長期連休をとるということはヨーロッパ全体の傾向としてあるため、W ではなく L が重要だということを教えたいです。その一方で、社会科では日本国憲法の労働の義務を教えないといけませんが、それは小中学校で教えれば良いと思います。労働の義務を果たしたら、そのあと何が待っているかということをしちゃんと教えないといけないので、高校生には L の重要性を教えたいです。

それを実践する機会が観光教育にあると思っています。

二点目は、旅行の方法をきちんと教えたいです。自分が旅行を作り上げることや旅行をする技術が低下しているという印象です。私の最初の長距離旅行は、小学6年生の頃に関西へ一人で4泊5日の旅行でした。夜行列車に乗って現地で遊び、一人で帰ってきました。中学生の頃は友人と沼津に行って、駅に泊まり、地元の方と遊ぶ経験をしました。そういったことは旅行のスキルがないとできません。私は小学生のころにはすでに時刻表が読め、運賃の仕組みなどを理解していましたが、今の子どもたちはこういったことができるのでしょうか。すごく難しいと思います。現代であれば、スマートフォンでゲームができるのと同じように、旅行のRPGゲームがあると良いと思います。そして、旅行の技術（どこの国に行っても旅行ができる能力）を高校時代に完成させてあげたいと思っています。

三点目は楽しさの話です。楽しさを求める時に、高校までに文学・美術・音楽・スポーツなどの実技系の経験はしていますが、さらにその中の最高の美しさのようなものに「触れたいと思う」、「目指したいと思う」ということを観光で体験させたいと思います。なぜ京都がきれいなのかを教え、体験させ、考えさせ、品位を磨く経験をさせたいと思います。

四点目は観光のオンライン化です。オンライン上に出来上がっている観光は、実は今までこの会議では議論されなかったが、高校生には経験させることが必要と思います。コミュニケーション力という点で、人と交流を促進する方法や理念も高校生の間に教えたいと思います。高校卒業後、観光学部に行く生徒もいると思うので、数学など観光研究のための基礎能力をつけてあげたいと思います。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

非常に勉強になりました。話を聞いて、私の持つ観光教育のイメージは異なっていたという印象です。私が話していたのは旅の受入れ側として生徒がどう振る舞うか、キャリア形成をどうするかという点で話していました。村上先生のお話は、自分が楽しむという視点、自分のライフを楽しむ視点の話だったので、観光教育として視点は分けて考えた方が良いと感じました。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

観光教育の議論でよくでてくるのが、観光を学ぶのか、観光で学ぶのかという議論です。私自身の取り組みはどちらかというとなら観光で学ぶスタンスで、観光を教育ツールとして認識しており、気づく力や興味を持っている分野の調査の学習ツールとして感じています。

社会とのかかわりの観点でいうと、都内のアンテナショップに行き現場の人の話を聞くということをしています。今年はコロナのため生徒が各アンテナショップに分散してインタビューを行うという形式で実施し、県の魅力を、アンテナショップを通じて発掘・考察して発信するプレゼン大会を行いました。観光に携わっている人の話を聞くことで、地域の思いを高校生に話してくれて楽しかったという生徒の感想がありました。社会調査を通じて、人とのふれあいで得た感動などが、大学や社会人になった際の調査の動機になるかもしれないと思いました。

一方で、村上先生の楽しむ視点も重要だと思い、ぜひ実践したいと思いました。「旅する人の観光学」という選択講座名で授業をしていますが、誰もが旅をする現代、旅することがより楽しくなることを学ぼう、ということで、観光の授業展開をしています。これらの視点も観光教育にお

いて同時にやるべきことだと思えます。人生を豊かに何が楽しく生きていくか、高校教育ではなかなか持ちにくい観点だと思えます。どこかで豊かな人生をイメージしながら進路を検討してほしいと思っており、大学などの進路選択では、将来の楽しみや仕事のバランス、こんなスキルがほしいなど、人生を楽しむ視点も含めた進路指導が必要だと思えます。観光を通じて自分のやりたいこと、豊かな人生を考えてみないか、と提案できるかもしれないと思っています。

○立教大学・村上委員

イギリスの高等学校カリキュラムの中には演劇があり、社会科学からするとソシオメトリーを学ぶという授業です。演劇の科目の点数はどうつけるのか興味があります。生徒はとても楽しんでいて、体育より演劇の方が楽しいと答えるという話もあります。与えられた条件で演じることが楽しいかどうかを客観視することが面白いと思いました。

○日本大学・宍戸委員

「観光で教える」と「観光を教える」は別物だと思えます。観光を教える場合も、観光の基礎教育として、観光者としてよりよく生きていくために地域を理解する・おもてなしを理解するなどの観光教育もあれば、ビジネス視点での観光実務教育などがあると思っています。観光を使って教育する場合は「教育観光」をよく使いますが、それは実行力など教育で培いたい能力を観光の場所や知識や経験によって育てる時に使い、修学旅行が本来良い例と思えます。一方で、豊かに生きていくことが重要になってきているなかではありますが、現状は教育全般として就職のための学習が強く、豊かに楽しく過ごすことの視点が欠落していると思えます。

観光の楽しみは観光学ではあまり論じられておらず、経営やビジネス・まちづくり・システムなどの視点が多く語られてきました。本来なら、小中学校の多感な時期こそ観光の楽しさを教える必要があると思えます。観光で学ぶだけでなく、観光の魅力を教えることが必要だと思えます。観光教育の研究を高校で行った際、観光学科がある高校、総合学習で実施している高校の先生を調べたが、多くが商業の先生で次いで社会科の先生でした。中には理科や体育や家庭科、英語の先生もみえました。そのような先生方は極少数で、それぞれの先生が問題意識を持って観光を使った教育を実施されていましたが、それを観光教育とは思っておらず、地域理解教育・郷土教育・まちづくり教育などの地域を素材に学習しているケースがほとんどでした。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

当校は、課外活動として実施しています。南さつま市が「飛び立て高校生事業」を行っており、地域を知りたい・楽しみたい子たちを集め課題で行っています。

○日本大学・宍戸委員

高校普通科では、課外活動がメインになっているケースと、教科の中で素材として取り上げているケースがあります。授業として継続していく観光教育と、トピックス的にやっていく観光教育があると思っています。家庭科など、食と関連付けて取り入れている先生も意外といえると思うので、各教科で何やっているかを把握すると面白いと思っています。普通教育は教室で実施し、社会と接点を持たない授業が一般的なので、社会との接点を持って活動できることが観光の強み

だと思っています。私たちはそれを伝えていきたいが、現場の先生がどこまでやる気を持ってくれるか気になりました。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

私が実践している取組は、私の気が変われば終わる活動です。私は継続していきたいと思っており関わる先生も増えてきています。普通科に「探究」という科目があり、今年度は地域について考える時間を設定して継続していきたいと思っています。

観光教育と言っても戸惑う先生が多く、どういうことをしたら良いのかという声を聞きます。分かりやすいところでいうと、修学旅行の自主研究の事前事後の指導として導入していくことかと思えます。

○立教大学・村上委員

課外活動を特別活動に入れられないでしょうか。修学旅行や HR のように特別活動に入れられると制度化できると思っています。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

観光教育に関する制度を作る必要性は感じています。

○立教大学・村上委員

高嶋先生や私の学校は学校指定科目になっています。教科を作るのは難しいが、学校指定科目をつくるのは私立高校では難しくないと思っています。前段階として、特別活動に位置付けて年間スケジュールに入れ、選択式にしていく方法があるかもしれません。例えば、淡路島・石垣島・大島では郷土芸能として行っている事例を知っています。

中村先生の話にあった地域でお金を生み出す経験というのは、具体的に何かを売って店員させるということもあるが、イールドマネジメント（差別的料金制度）ととして、駐車場料金を時間帯で変える、季節によってホテルの料金を変えるとという仕組みも教える必要があると思います。その話を生徒にした時の生徒の驚きが今でも忘れられません。商業科では一般的でしょうが、知恵によって稼げることを普通科でも教えることも重要だと思いました。

また、地域の学生の一方的な利用ということについて、これは協働することで「生徒が知識をつくりだし、地域に還元する（利用する）」と言えらると思います。宍戸先生の専門分野である知識を創り出すことを教えるということですが、新しい知識（子どもたちが作ったもの）を試して知識を定着させる、このことが中村先生の話にピッタリ合っていると思いました。「知識創造」を組み合わせるとイメージがあると感じました。

普通科と専門科の大きな違いとしては、生活の質、観光の楽しみを探究できることが普通科のオリジナルな部分だと思っています。学校の先生がする課外授業（観光甲子園など）で、東京の大島の国語の先生が実施している郷土芸能チームがあるが、大会で郷土芸能をやって他の人が感動してくれることに感動するという話がありました。社会科では感動は扱いません。国語では感動という言葉が扱えるので、彼らは観光の革新的な部分を学んでいると思いました。

○日本大学・宍戸委員

ビジネスとしてどう感動させるかというシステムを考えるのが専門科だと思います。

先ほど私が提示したものに誤解が生じるかもしれませんが、自分の評価とどう繋げるかという話と、教員として観光が使えるかというところが、混在しているところがあるため、整理しておくべきだと思います。エコツーリズム、SDGs、観光開発と自然保護を結びつけることはできると思いますが、専門性として課外活動、郷土芸能などにおいて観光は使えると思っています。

○立教大学・村上委員

観光協会やDMOが観光地にはあるが、観光協会が観光教育のプログラムを作って高等学校に売るというケースが志賀高原にあります。志賀高原がユネスコエコパークに指定され、教育活動として教育プログラムを販売しています。利用している学校は偏差値が高い印象です。

理科のアプローチでは、天文観測、博物館訪問という内容でした。これは特別活動でも課外活動でもありませんが先生が連れて行っていました。理科も観光に関係あることを実施している授業であり、掘り起こして一緒にやりましょうということもあり得ると思います。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

観光教育を3年間やってきた感想として、自身の専門科目の理科とも絡めたいと思いました。

○立教大学・村上委員

普通科は多くの学生が大学進学だろうと思っています。埼玉県の県立高校で職業に就くことに力点をおいて教えているところがあります。その音楽の教員が開成中高の卒業生で、デジタル音楽の大学を卒業し、様々な高校で吹奏楽部を教えています。教えてもらった生徒たちは、デジタル分野の音楽のマーケットに興味を持ち、その専門学校からその分野に就職しました。吹奏楽部は大学進学する生徒が2/3を切っていたようです。今、高校生は大学進学が正しい道の選択なのかという疑問を持っていて、職業とは何か、働くことは何かということに興味を持つ子が多くなってきているように思います。大学進学率はここまでは伸びてきたが、これからも伸びるのかは、疑問に思っています。

我々として議論しておきたいことは、大学進学する生徒に対して高大接続はできているが、普通科で大学や専門学校に進学しながらキャリアとして観光を考える生徒に対する教育です。高等学校の時に自分の進路をしっかりと考え、進路としてキャリアを選んでいる子は働く目標を創り出しています。そのような生徒に我々はどのような教育ができるのかということも議論しておく必要があると感じています。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

進路としてキャリアを選ぶという視点で、本校は進学（国公立大学を目指す）コースと特進コース一類（就職視野）があります。その中で、イラストを描くのが好きな生徒がいて進学について迷っていたが、イラストを地域や観光協会のチラシ、コロナの時にはテイクアウト促進プロジェクトに絵を提供して使われ、結果的に彼女はイラストを描く専門学校に進学しました。そういった大人が認めてくれることの成功体験を作り出していくのは良いと思っています。

○日本大学・宍戸委員

商業高校は専門学科に分かれていて、中学校から選択してきているので普通科の大学選択とは異なり、中学卒業の段階で進路を決めています。現場での経験は高校時代に経験していて、商業科の生徒は自分がやっていたことを伸ばそうと思って大学に入ることが多いと思います。普通科の学生は学部を好きに選びます、その選択に教員はあまり入り込まないと思っています。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

彼ら彼女らなりに大学の学部をイメージして選びますが、大学の研究内容を具体的にイメージしながら選択していくことは難しく、入学してこんなはずではなかったということは実際に起きていると思います。

○日本大学・宍戸委員

高校生のキャリア教育と観光教育をつなげることについて、専門学科は実践しやすいか、普通科での取組は正直ピンと来ていません。専門科と比較するとフリーハンドなのが普通科であり、本人の興味本位という前提で取組むものと理解しています。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

普通科でのキャリア教育は、大学選びだけでなくその先の人生を見据えて大学選びをするというようなことはなかなかできていないと思います。もちろん従来に進学指導からは変わってきていますが、依然として高校と大学では学ぶ内容が違い、ギャップを埋められずに送り出していることも実態だと思っています。

○立教大学・村上委員

経産省の未来の教室は教育としてあるべき形のひとつかと思う。自分の高校の学生は、成績が一番上の生徒は経営に行き、次に経済、2/3 から 1/3 が観光分野を選択する。彼らはキャリアを意識している子たちで、卒業後、観光産業に就くわけではなく結構銀行に就職することが多いです。高校のうちにキャリアのことを教えておくということは、社会とのつながりという点において、他の教科にはない観光教育の特殊性とも言えると思います。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

大学に行くことの疑問は生徒の中にあると思います。2年前に慶応大学行った子がいますが、人脈づくりとして割り切って大学に行きました。観光などで働く大人に関われば関わるほど、自分のキャリアについて考えることも多くなり、何のために大学に行くのかと考えると思います。

○日本大学・宍戸委員

専門学科も変わってきているが、地方の商業高校の生徒は7~8割が地元の銀行に就職しています。首都圏は輪切りにされていて高卒では名が通った企業に就職できないため、大学に入ることが多いと思われます。地方では下手な大学行くよりは地元の強豪企業に就職したいという考えが

あるように思います。業科は就職イメージで来ている子や、経済的基盤も含めて就職をイメージしている子も多く、能力あっても経済的観点で大学に行けない子もいると思います。

○立教大学・村上委員

東京と地方の違いという点で、東京の総合高校は始めたのが早かったが、その割に総合高校出身者の進学率が高い印象です。キャリアを教えるための学校なので、総合高校を出て専門学校に行って社会に出る、そういう道筋が最初の頃はできていたはずですが、今、総合高校の卒業生をできるだけ大学に行かせようと校長がするため、総合高校をもある種のキャリア的な視点で大学進学が強くなっている気がします。そのため、現状を踏まえれば、総合高校で観光教育を実践するよりは、普通科で観光教育を実践すべきだと考えています。

③観光教育の「意義・目的」について

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

自身の取組内容から、インバウンドとアウトバウンドを分けた方が考えやすかったため、意見を分けています。

アウトバウンドを活動に取り入れられていませんが、外に行く視点では自分の地域と他の地域の比較が大事だと思います。インバウンドの目的は、地域に高校生が受け入れられることで、文化を継承することが目的です。地域とのかかわりで思わぬ化学反応があるかとも思っています。

学びの選択肢を増やすという視点は大事だと感じており、学校内だけの学びだけではなく外でも学べるようにしたいと思っています。生活と学校との学びが分断されているのが普通科高校としての課題・課題意識として持っており、生活圏の中でも学んでいけるような選択肢の一つとして観光教育があると良いと思います。

○立教大学・村上委員

WLB が重要だと思っており、普通科ではここをしっかりと教えるべきであると思います。また、旅行の技術や企画力、旅行の経験がゲームよりも豊かなものだという点を説明できるような学びを教えたいと思います。委員④のご意見のように説明してしまうことも一つの方法だが、観光教育が他の教育とどう違うのかということは明確にすべきだと思います。

○法政大学国際高等学校・高嶋委員

観光教育は主権者教育と捉えることもできると思っています。自分自身が社会の運営に関わっていくということを考えるとき、模擬投票や政治制度を学ぶ観点もあるが、教員の用意した枠組の中ではなく、高校生が自分の力で社会が動くことを実感することができれば理想的であり、それは観光教育が実現する最も特徴的な成果だと思います。

観光の枠組みで何かが見える・動くという実感は、自分自身の力でという実感が社会への関わりを意識するきっかけになり、それが観光教育の大きな意義目的の一つではないかと思っています。

○立教大学・村上委員

遊ぶことを教える必要ないという人もみえると思います。しかしながら、遊ぶことの意義は生

活を豊かにすることの意義であり、「それをあなたはどうか考えるか」という主体性を問うことができるのではないでしょうか。

高嶋先生のご意見の主権者教育で気を付けることは、主権者が 2 項対立に入れられてしまうことで、それは時代遅れであるということです。どのように社会と関わるかということ投票や政治行動ではないところで学び、体験する機会になるのではないかと思います。

○日本大学・宍戸委員

資料 4 を踏まえて考えたとき、専門学科においては、観光の基礎知識の習得と実務技術が抜けられていると思います。観光教育の意義目的となると大学教育も含まれる。観光庁として初等中等教育における観光教育の意義目的として打ち出していくのかを明記すべきだと思います。観光教育の意義目的という言葉だけで動くと、地域理解や観光分野の関心に感知するなど狭い印象を受けます。初等中等教育となれば、実務性や観光推進に支える基礎教育も含まれます。観光のことを意識しているので、教育がもつ意義が観光にも波及する視点が必要かと感じました。

普通科教育としては、科目特性を実現するというより観光の力を使って教育を利用しているところが強いため、そのような軸が必要かもしれないと思いました。また、観光を含め余暇を充実して過ごす視点も重要だと感じました。

修学旅行を活用する際、目的地も多様化しているから、地域の素材が活かせれると思います。

○希望が丘学園鳳凰高等学校・中村委員

修学旅行を起点にすると他の教科の先生も分かりやすいと思います。

○日本大学・宍戸委員

修学旅行にもっと他の教科の先生の視点を加えるような形にしたら、観光教育が分かりやすいものになると思います。

○立教大学・村上委員

私が校長をしているときの中学校の修学旅行はパッケージから選べる旅行でしたが、選ぶ地域の問題点がどの教科のどの単元に関係があるのかを説明したら、先生方にとっても喜ばれました。

オンラインと観光教育の関わりも考えていきたいと思います。協議会には JTB でオンライン学習企画を先導している委員がみえます。彼に修学旅行を企画する側からみて、修学旅行において学校が抱えている課題を話してもらいたいと思っている、いかでしょうか。WLB を話すときに、私は出身が社会学のため見方が機能的になってしまうため、若者文化を研究している哲学者の人からみて、高校生が学ぶべき将来に対する視野を思想的な観点で聞きたいと思っています。観光教育は学校によって臨み方に違いがあって良いと思っているため、哲学の教科における観光教育があっても良いと思います。

○観光庁・刀根

宍戸先生のご意見について、来年度「未来の観光人材育成事業」予算について検討しています。

○日本大学・宍戸委員

しっかり銘打った方が良いと思いましたが、範囲を広げるのは賛成です。

○観光庁・西川

私も観光教育という事業から観光というものにいろいろ考えを巡らせてはいましたが、資料に落とし込むのは難しく、うまくできていない部分もありました。観光教育を実践されている方々がしっかり原稿化してくれている部分があり、聞いていて腑に落ちる部分、気づく部分がたくさんありました。

5. 事務連絡

○事務局・MURC 小森

コロナ感染症の状況もあり、今後もオンライン参加を推奨させていただきたいと思います。都内近郊の方でオンライン環境が整わず、参集をご希望される場合は、本日と同様の対応とさせていただきます。また、本日の議論の内容は、トピックとして他の分科会でもご紹介させていただきます。

以上